

令和 4 年 6 月 19 日現在

機関番号：34303  
 研究種目：若手研究  
 研究期間：2018～2021  
 課題番号：18K17510  
 研究課題名(和文) アルコール依存症を抱える家族のリカバリーの解明

研究課題名(英文) Recovery of Families Coping with Alcoholism

## 研究代表者

磯野 洋一 (Isono, Yoichi)

京都先端科学大学・健康医療学部・講師

研究者番号：50614517

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：アルコール依存症を抱える家族のリカバリーの解明のため、2段階にて研究を実施した。1段階目(課題1)「リカバリーの概念分析 - アルコール依存症をもつ家族への活用 -」の結果、属性は、構造と機能それぞれが抽出された。リカバリーの構造的な属性は、【過程】【強い個別性】の2つの属性が抽出された。リカバリーの機能的な属性として、【相互依存】【ポジティブシンキング】【柔軟性】【好奇心】【葛藤への抵抗力】【主導権と責任】【自己変革】の7つの属性が抽出された。2段階目(課題2)上記リカバリーの概念分析を基に、「アルコール依存症を配偶者にもつ夫婦のリカバリーのプロセス」を明らかにした。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

アルコール依存症は「家族の病」であり、アルコール依存症当事者のみならず、家族全体が崩壊に至る病である。一方で、家族が危機を乗り越え、希望を持ち新たな人生を送る過程としての家族のリカバリーを解明することで、家族がより幸福な生活へとつながる。本研究における社会的意義は、社会で広く使われ曖昧になっているリカバリーの概念分析を行うことで、その構造と機能を明確化し、アルコール依存症の家族のリカバリーの活用性を検討可能にした。アルコール依存症を配偶者にもつ夫婦のリカバリーのプロセスを明らかにすることで、効果的な看護介入の時期の特定や介入方策を検討し、実現可能な看護介入の開発へ繋げる基礎的資料となる。

研究成果の概要(英文)：To examine the recovery of families coping with alcoholism, a two-phase study was conducted. Phase (Task) 1: <Concept Analysis of Recovery - Application to Families with Alcoholism -> identified 2 structural and 7 functional attributes of recovery: structural: [process] and [marked individuality]; and functional: [interdependence], [positive thinking], [flexibility], [curiosity], [resistance to conflict], [initiative and responsibility], and [self-reformation]. Based on the results of this concept analysis of recovery, Phase (Task) 2: <Recovery Process among People with Alcoholic Spouses> was clarified.

研究分野：アディクション看護学

キーワード：アルコール依存症 リカバリー 家族看護

## 1. 研究開始当初の背景

社会的背景：アルコール依存症は身体的・精神的問題のみならず、社会的に多発している飲酒運転による死亡事故や自殺の根底にアルコール依存症が隠れている。我が国のアルコール依存症者は、男性 95 万人、女性 14 万人で 100 万人を超えているが、この数字は氷山の一角である。政策は、2010 年に WHO は「アルコールの有害な使用を低減する世界戦略」を決議し、日本では 2010 年に「重度アルコール依存症入院医療管理加算算定のための看護師養成研修会」が行われるようになり、2013 年 12 月には「アルコール健康障害対策基本法」が可決された。以上のように、アルコール依存症は日本のみならず国際社会でも問題視されており、早急に取り組むことが必要な精神科疾患である。

研究の背景：「アルコール依存症の回復」に関する文献検討の結果、アルコール依存症は「家族の病」であり、完治はしないが回復することは可能である。回復は「医学的回復」と「リカバリー」に区別される。「医学的回復」とは、(精神)症状が無い状態や発症以前の状態や機能に戻るゴールを意味している。一方リカバリーの意味は、何らかの症状があってもその人が自主的に希望する人生に新たな意味を見出しながら生活し続ける過程を意味する。アルコール依存症は慢性疾患であり、磯野ら(磯野ら、2016)の「アルコール依存症者 A 氏が体験している精神内界 - 退院後に書いた詩歌の分析より」の研究結果でも明らかにされたように、病院から退院しても飲酒への強い渴望を求め続ける。つまり、アルコール依存症は慢性的な疾患であるため、医学的なゴールを目的とする「医学的回復」ではリカバリーに限界が生じ、アルコール依存症がリカバリーされることは困難である。また、アルコール依存症の回復に関する研究では、回復には「底つき体験」という心身共に限界に達した状態を経験した後に回復に繋がる見込みがあるとされている。しかし「底つき体験」の状態に達する前に自殺等で死に至るケース、交通事故に発展するケースも多く、「底つき体験」の状況をどのように考えて看護介入するかを明確にする必要がある。アルコール依存症とリカバリーに関する研究は、磯野ら(磯野ら、2013)の「アルコール依存症者の妻の対処 断酒会会員である夫のインタビューに基づいて」というアルコール依存症の夫を対象とした研究において、夫(当事者)自身の視点ではあるものの、夫(当事者)の断酒生活が続いている妻(配偶者)の対処は、夫が飲酒していた頃とは違う対処方法としての「新生」が起こり新たな生活が始まることが申請者らの研究により明確にされた。「新生」は、リカバリーの概念である「幸福と思える生活へと向かう新たな過程」で説明可能であり、リカバリーが生じていると推測される。アルコール依存症の回復に関する研究の研究対象は、アルコール依存症の回復過程の妻(配偶者)の様相は明確にされているが、当事者とその配偶者の夫婦を一ユニットとして捉えた回復過程の研究は皆無であった。

本研究は、家族を一ユニットとした「アルコール依存症を配偶者にもつ夫婦の回復への看護介入の開発」に繋げる重要な研究である。

## 2. 研究の目的

[アルコール依存症の家族のリカバリーの解明]するために、下記 2 つの目的を設定した。

研究目的 1. リカバリーの概念分析 - アルコール依存症を配偶者にもつ家族への活用 -

研究目的 2. アルコール依存症を配偶者にもつ夫婦のリカバリーのプロセスを明らかにすること

## 3. 研究の方法

### 1) アルコール依存症の家族のリカバリーの概念分析

本概念分析は、Walker & Avant の概念分析の手法を参考にした。Walker & Avant による概念分析は、概念の構造と機能を明確にすることが目的である。分析の手順は分析対象の文献より定義や構成要素などを抽出し、カテゴリー化して概念を定義づける属性を導き出した。次いで、先行要因と帰結は属性との関連を検討しながらカテゴリー化して明らかにし、リカバリーの概念を定義した。分析対象の先行文献は国内外の入手可能であった文献(研究論文、解説、清書等)を対象とした。

### 2) アルコール依存症を配偶者にもつ夫婦のリカバリーのプロセス

データ収集は、参加観察と非構造的面接法の組み合わせにてデータを収集した。参加観察は、主に参加者として自助グループに参加した。非構造的面接では、研究参加者の夫婦に対して、リカバリーに至るまでの夫婦関係の体験談をナラティブ生成質問を促し、自由に体験談を一通り語っていただいたから、特に人間関係の相互作用に関連する箇所を深く質問した。1 組目の夫婦の面接より得られたデータを基に逐語録を作成し、分析テーマと分析焦点者を決定した。1 組目の研究参加者から得られたデータをヴァリエーションとして抽出し、2 組目以降に面接を実施した。概念の生成は、一ヴァリエーションの解釈を幾つか行った上で概念を生成した。その後、生成した概念に基づき対極と類似で比較した。また、概念化する過程でカテゴリーも生成していった。最終的に理論的飽和化に至るまで繰り返した。

#### 4. 研究成果

##### 目的1の成果

リカバリーの属性として構造的属性と機能的属性が抽出された。リカバリーの構造的な属性は、【過程】【強い個別性】の2つが抽出された。機能的な属性として、【相互依存】【ポジティブシンキング】【柔軟性】【好奇心】【葛藤への抵抗力】【主導権と責任】【自己変革】の7つが抽出された。

リカバリーの属性の構造：【過程】は《再獲得の過程》《非直線的》《長期経過》《際限無し》《ステージ》の5つのカテゴリーから構成されていた。【強い個別性】は《文脈性》《パーソナル性》《悲哀からの立ち直り》の3つのカテゴリーから構成されていた。

リカバリーの属性の機能：【相互依存】は《存在価値を得る》《共有し繋がる》《他者との相互作用を発揮する》《他者と一緒に考える》の4つのカテゴリーから構成されていた。【ポジティブシンキング】は《目標をもつ》《前進し続ける》《生活の工夫をする》《ストレングスを活用する》《前向きな感覚》《人並みの生活を求める》《豊かな将来設計をする》《信じる力》の8つのカテゴリーから構成されていた。【柔軟性】は《苦境からの立ち直り》《人生を取り戻す》《精神的柔軟性が浮き彫りにされる》の3つのカテゴリーから構成されていた。【好奇心】は《学ぶ》《探求する》の2つのカテゴリーから構成されていた。【葛藤への抵抗力】は《阻害因子を跳ね除ける》《折り合いをつける》《生きづらさの浮上》《病気からの避難所》《否定からの脱却》の5つのカテゴリーから構成されていた。【主導権と責任】は《自己決定と責任》《主導権を取り戻す》《自分らしさを発揮する》《他罰的思考からの脱却》の4つのカテゴリーから構成されていた。【自己変革】は《自己開示する》《自分を変える》《元気な自分の気づき》《自分を認める》の4つのカテゴリーから構成されていた。

リカバリーの先行要件として、促進要因と阻害要因が抽出された。促進要因は、【貴重な絶望体験】【自分の病気を認める】【ストレングスの萌芽】【絶妙なタイミングでの支援】【包括的な支援環境の整備】【一人の人格者として関わる専門職者の存在】【親密さと繋がり】【知識・技術の獲得】の8つの促進要因が抽出された。阻害要因は、【元々ある疾病や症状の壁】【自己に対する否定的感情】【固定化する病者役割】【情報不足】【孤独・孤立】の5つの阻害要因が抽出された。

リカバリーの帰結として、【QOLの向上】【新生】【絆の獲得】【弱みと共存】【健康の保持・増進】【役割の拡大】の6つの帰結が抽出された。

以上の属性より、リカバリーを次のように定義した。リカバリーとは「ポジティブシンキングや好奇心を根底に持ち、何らかの困難や障壁、葛藤が生じた場合でも、周囲の人と相互依存しながら、最終的に自己の主導権と責任の基、柔軟性と葛藤への抵抗力を発揮しつつ、その葛藤をも貴重な絶望体験としてさらなる自己変革へと繋げ、行きつ戻りつしながら進む極めて個別性の強い過程のこと」と定義した。

##### 目的2の成果

###### 1) 研究参加者の特性

研究参加は、断酒会と家族会会員の夫婦15組であった。

###### 2) アルコール依存症を配偶者にもつ夫婦のリカバリーのプロセス

アルコール依存症を配偶者にもつ夫婦のリカバリーは3つの時期を行きつ戻りつしながら進み、夫婦共に人間関係の成長をし続けていた。具体的には、「夫婦のみの閉ざされた時期」「第三者が介入してからの時期」「新生の時期」の3つの時期である。「夫婦のみの閉ざされた時期」は夫婦の二者間の夫婦システムを中心として関係性が悪化していく時期である。この時期の夫婦の相互作用は、【原動力への変換】【家族内での孤独】【根底にある絆】【我に返る】【社会的関係への挑戦】という夫婦二者間の閉ざされた相互作用が主である。この時期の終盤は、当事者の配偶者が成長へ先導をする時期であった。夫婦のみの閉ざされた関係に「第三者が介入してからの時期」は、【一時の安堵】【責任転嫁】【期待の裏返し】【居場所の確保】【自我の構築】【新たな関係性への誘導】【新生への抵抗】【絆の表面化】という時期で、夫婦のみの閉ざされた関係性から、社会的な人々との開かれた関係性へと変化し、先に【自我の構築】をする当事者が、閉ざされた時とは逆転し、リカバリーへの人生へと配偶者を誘導していた。「新生の時期」は【絆の深化】【継続した自己洞察】【前向きな感覚】【切磋琢磨】で、社会的な関係性も向上させながら、夫婦が共に相互依存しながら成長し続けていた。

以上の3つの時期におけるリカバリーのコアカテゴリーの中で、【根底にある絆】【絆の表面化】【絆の深化】というように、夫婦には何等かの【絆】が存在していた。また、リカバリーには重要となる相互作用の帰路は、「夫婦のみの閉ざされた時期」「第三者が介入してからの時期」にそれぞれ存在していた。「夫婦のみの閉ざされた時期」は配偶者が特に重要な他者から受ける相互作用の結果である【我に返る】ことである。「第三者が介入してからの時期」は当事者がピアとの関係性で、先に過去の自分を振り返り【自我の構築】をしつつ、その配偶者を【新たな関係性への誘導】することで、断酒の有無以上に、当事者自身の人間性を含めた新生へと誘導する相互作用が第二の岐路であった。今後、以上の結果を更に洗練化していく。

#### 文献

Anthony, W.A. (1993): Recovery from Mental Illness: The Guiding Vision of the Mental

Health Service System in the 1990s.Reprinted from Psychosocial Rehabilitation Journal 16 (3) 11-23 .

榎本稔・安田美弥子 (1995): テキストブック・アルコール依存症 . 太陽出版、東京 .

磯野洋一 (2018): アルコール依存症の回復過程における妻のストレングスの構造と機能、一般公募「在宅医療研究への助成」完了報告書、1-21 .

磯野洋一、野嶋佐由美 (2013): アルコール依存症者の妻の対処 断酒会会員である夫のインタビューに基づいて、家族看護学研究、18 (2) 73-82、2013 .

磯野洋一、小野坂益成 (2016): アルコール依存症者 A 氏が体験している精神内界 - 退院後に書いた詩歌の分析より、松蔭大学看護学部紀要、創刊号、93-100、2016 .

Jackson, J.K. (1954): The adjustment of the family to the crisis of alcoholism, Quart. J. Stud. Alc., 15:562-586.

重黒木一、世良守行、葦澤博一 (2019): 事例でわかるアルコール依存症の人と家族への看護ケア 多様化する患者の理解と関係構築、中央法規出版、東京 .

厚生労働省 (2016): アルコール健康障害対策推進基本計画 .

松下年子 (2015): 依存症からの回復とその意味、アディクション看護学、メヂカルフレンド社、第1版、35-60、東京 .

野中猛 (2005): リカバリー概念の意義、精神医学、47 (9) 952-961 .

越智百枝、野嶋佐由美 (2012): アルコール依存症者の家族のターニングポイントに関する研究、家族看護学研究 18 (1) 25-36 .

小俵ミエ子、石原和子 (2009): アルコール依存症者と家族の断酒会参加による意識の変化に関する研究、日本精神科看護学会誌、52 (2) 228-232 .

小俵ミエ子、石原和子 (2009): アルコール依存症者の断酒会参加の意味に関する研究、インターナショナル Nursing Care Research、8 (4) 37-46 .

篠原百合子、武政奈保子、山口恵 (2012): アルコール依存症者家族の回復過程の検討、東都医療大学紀要、2 (1) 25-33 .

鈴木和子、渡辺裕子 (2012): 家族を理解するための諸理論、家族看護学 理論と実践、日本看護協会出版会、第4版、46-59、東京 .

安田美弥子 (1997): アルコール依存症による家族機能崩壊に対しての看護、Quality Nursing、3 (4) 348-354 .

安田美弥子 (1996): 依存症の家族に対する看護の研究 (1)、東京保健科学学会誌、2 (1) 16-20 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 磯野洋一
2. 発表標題 リカバリーの概念分析（第一報）- アルコール依存症当事者とその配偶者への活用 -
3. 学会等名 第35回日本看護福祉学会学術大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------